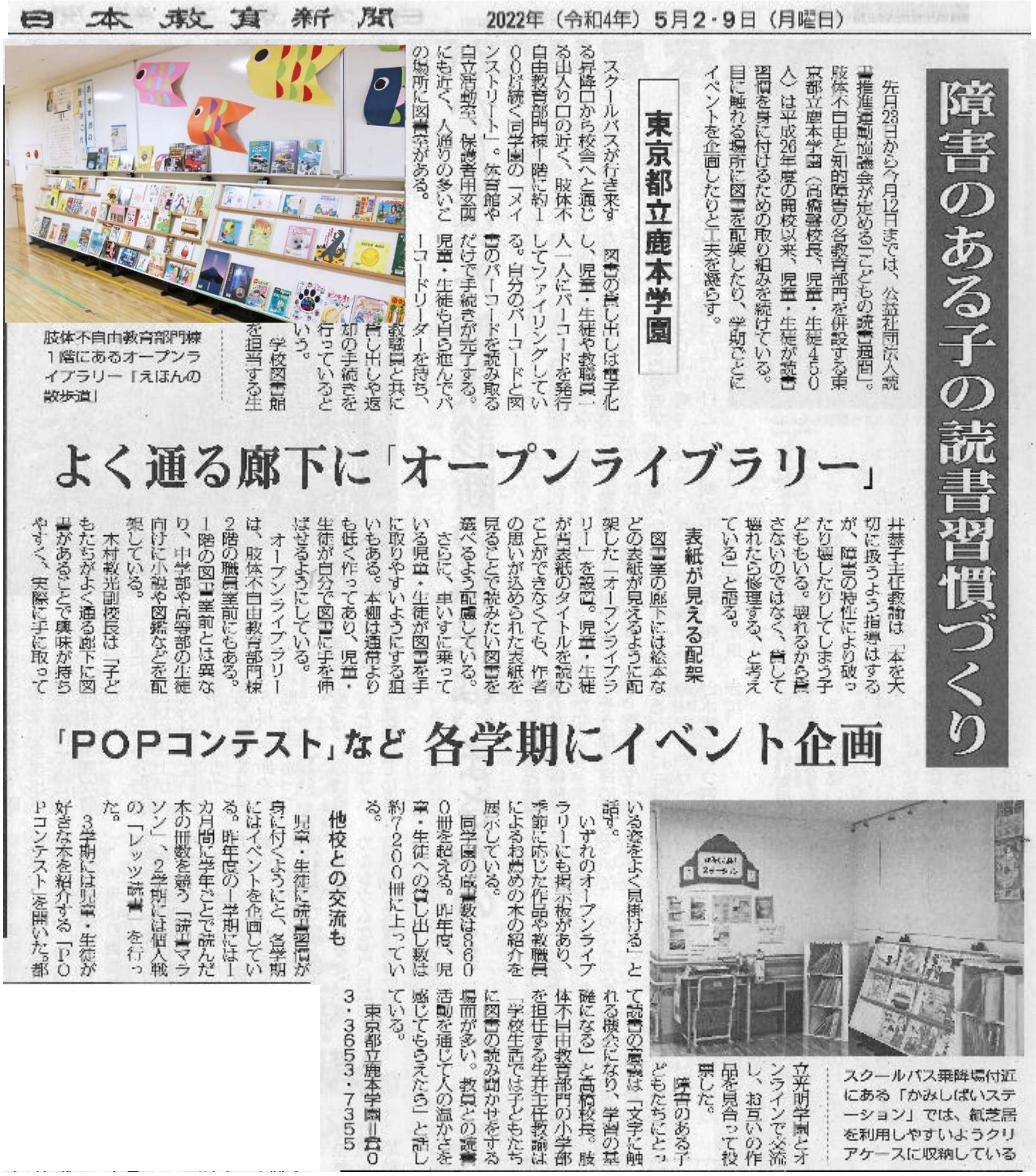
SHIKAMOTO GAKUEN
TOKYO
東京都立 鹿本学園

令和4年5月 16 日

「本校の読書活動について」

日本教育新聞社様に本校の読書活動の取組を御紹介いただきました。
新聞記事の著作権は日本教育新聞社に帰属し、無断転載を禁止いたします。



日本教育新聞　2022年（令和4年）5月2・9日（月曜日）

障害のある子の読書習慣づくり

東京都立鹿本学園

先月23日から今月12日までは、公益社団法人読書推進運動協議会が定める「こどもの読書週間」。肢体不自由と知的障害の各教育部門を併設する東京都立鹿本学園（高橋馨校長、児童・生徒450人）は平成26年度の開校以来、児童・生徒が読書習慣を身に付けるための取り組みを続けている。目に触れる場所に図書を配架したり、学期ごとにイベントを企画したりと工夫を凝らす。

よく通る廊下に「オープンライブラリー」

スクールバスが行き来する昇降口から校舎へと通じる出入り口の近く、肢体不自由教育部門棟1階に約100㍍続く同学園の「メインストリート」。体育館や自立活動室、保護者用玄関にも近く、人通りの多いこの場所に図書室がある。

図書の貸し出しは電子化し、児童・生徒や教職員一人一人にバーコードを発行してファイリングしている。自分のバーコードと図書のバーコードを読み取るだけで手続きが完了する。児童・生徒も自ら進んでバーコードリーダーを持ち、教職員と共に貸し出しや返却の手続きを行っているという。

学校図書館を担当する生井恭子主任教諭は「本を大切に扱うよう指導はするが、障害の特性により破ったり壊したりしてしまう子どももいる。壊れるから貸さないのではなく、壊れたら修理する、と考えている」と語る。

肢体不自由教育部門棟1階にあるオープンライブラリー「えほんの散歩道」

表紙が見える配架

図書室の廊下には絵本などの表紙が見えるように配架した「オープンライブラリー」を設置。児童・生徒が背表紙のタイトルを読むことができなくても、作者の思いが込められた表紙を見ることで読みたい図書を選べるよう配慮している。

さらに、車いすに乗っている児童・生徒が図書を手に取りやすいようにする狙いもある。本棚は通常よりも低く作ってあり、児童・生徒が自分で図書に手を伸ばせるようにしている。

オープンライブラリーは、肢体不自由教育部門棟2階の職員室前にもある。1階の図書室前とは異なり、中学部や高等部の生徒向けに小説や図鑑などを配架している。

木村教光副校長は「子どもたちがよく通る廊下に図書があることで興味が持ちやすく、実際に手に取っている姿をよく見掛ける」と話す。

「POPコンテスト」など 各学期にイベント企画

いずれのオープンライブラリーにも掲示板があり、季節に応じた作品や教職員によるお薦めの本の紹介を展示している。

同学園の蔵書数は8600冊を超える。昨年度、児童・生徒への貸し出し数は約7200冊に上っている。

他校との交流も

児童・生徒に読書習慣が身に付くようにと、各学期にはイベントを企画している。昨年度の1学期には1カ月間に学年ごとで読んだ本の冊数を競う「読書マラソン」、2学期には個人戦の「レッツ読書」を行った。

3学期には児童・生徒が好きな本を紹介する「POPコンテスト」を開いた。都立光明学園とオンラインで交流し、お互いの作品を見合って投票した。

障害のある子どもたちにとって読書の意義は「文字に触れる機会になり、学習の基礎になる」と高橋校長。肢体不自由教育部門の小学部を担任する生井主任教諭は「学校生活では子どもたちに図書の読み聞かせをする場面が多い。教員との読書活動を通じて人の温かさを感じてもらえたら」と話している。

東京都立鹿本学園＝☎03・3653・7355

スクールバス乗降場付近にある「かみしばいステーション」では、紙芝居を利用しやすいようクリアケースに収納している